

子育て支援プログラム「あそびの森」実践報告〈7〉

— 平成22年度実施プログラム —

若杉雅夫・三羽佐和子・松尾良克・伊藤功子
長谷部和子・篠田美里・杉山喜美恵
大西信行*・田中ヒロ江*

はじめに

平成16年度に開設した子育て支援活動「あそびの森」のイベントも本年度で7年目となる。常に地域の「親子支援」をめざし、参加者も年々増加の一途をたどっている。これは、7年間という年月とともに地域の方々にも広く知れ渡った結果を示し、参加申し込み者数は毎回100組を超える。

「あそびの森」の理念は、地域の親子に様々な遊びを提供するというだけでなく、親子、学生、教職員、それぞれが繋がりを持ちながら共に育つというところにある。

親子が一緒になって遊ぶ時間を持つ機会が少なくなってきた昨今、ここ「あそびの森」では親子での触れ合いや親子で協力しないとできない遊び、また、大学ならではの遊び等、他では見られない親子遊びを提供している。

学生は、ゼミ全員参加という形式を取り1・2年が一緒に取り組む。これは2年生が自分の経験を後輩たちに伝え、2年間という短い時間の中で、実習等では得られない親子との触れ合い、その中で親から聞ける子どもとの日常生活など、現場ですぐに役立つ保育力を身につけることができる良い機会となっている。

また、教員側から見れば、教室の中で見ることのできない学生の姿や早い時期での親子との触れ合いが学生の成長をもたらす。そして次の教育の方向性を見つけられる良い機会となっている。

22年度は保育の中に自然を取り入れる試みを「ネイチャーあそびの森」と称し実施した。時代の変化とニーズに応え学生と親子の成長に貢献できればと、新しい分野への挑戦も行っている。

*東海学院大学

平成22年度あそびの森プログラム

<月例プログラム>

- ① おんがくたんけんたい
5月22日 篠田 美里
- ② 段ボールのパズル絵を作ろう
6月26日 若杉 雅夫
- ③ 子・スライム等で感触遊びを楽しもう
親・懇話会 7月3日 三羽 佐和子
- ④ 親子で一緒に遊ぼう「できるかな？」
8月21日 伊藤 功子
- ⑤ 紙のおもちゃを作って遊ぼう
9月18日 松尾 良克
- ⑥ 楽しく歌ったり踊ったりしよう
10月16日 三羽 佐和子
- ⑦ 身近なものを使って遊具を作ろう
11月27日 田中 ヒロ江
- ⑧ 子・クリスマス会 親・懇話会
12月18日 篠田 美里
- ⑨ 「ぐりとぐら」になろう
1月15日 杉山 喜美恵
- ⑩ 粘土遊びでクッキー作り
2月5日 若杉 雅夫
- ⑪ 体をほぐして春を迎えよう
2月12日 大西 信行・居崎 時江

特 ネイチャー「あそびの森」

6月26日 長谷部 和子

<その他のプログラム>

- ① ブラジル人親子支援
- ② 「ペープサート劇を観る会」
- ③ 長良児童センター関連
- ④ 岐阜市青少年育成市民会議関連
- ⑤ 子育てサークル関連
- ⑥ 「ハッピーディ・あそびの森」
- ⑦ 「クリスマス会」

1. 活動報告

1) 前期プログラム (5月～10月)

プログラムNo.①

活動名 「おんがくたんけんたい」

実施日 平成22年5月22日(土)

10:00～11:45 13:30～15:15

ねらい

- ・身近にある材料を使って音のでるおもちゃを作り、その音を楽しむ。
- ・音探検遊びを通して、手作り楽器や他の楽器の音に出会い、音を鳴らす喜びを感じたり、歌にあわせて鳴らす心地よさを体験し、気持ちを開放する
- ・歌う表現を通して、親子のスキンシップを楽しむ
- ・学生の合唱を聴き、ハーモニーを味わう

参加人数 197名 参加家族53組
(保護者64名/子ども93名)

担当者 篠田ゼミ

参加スタッフ 教員5名 学生35名

内容

音探検では、身近な材料で手作り楽器を作りそこから出る思いがけない音を楽しむ。

本物の合唱を聴く。

プログラム

はじめまして

1 手遊び・・・棒が一本

2 ゲーム・・・よーいどん

3 音あてクイズ・・・どの楽器の音かな？

4 楽器を作ってみよう

5 音探検

6 みんなで鳴らしてみよう



おもちゃのチャチャチャ・おおきなたいこ
7大型絵本・・・どうぞのいす

8お姉さん・お兄さんの歌を聴きましょう

・ドレミのうた ・めだかのがっこう

・大きな古時計

9みんなであうたおう・・・にんげんっていいな
さようなら

総括・考察

この活動は、担当教員が提示した「テーマ音探検」を、2年生が内容(遊び)を出し合い、プログラムを構成し、当日の進行を担当したものである。子どもの生活の中にある材料を使って音の出るおもちゃに変身させ、思いがけない面白い音を楽しめるよう工夫した。学生はグループに別れ、教員の提示に自分たちの工夫を加え、遊びを創作していった。製作過程においては「どうしたら子どもが興味を示してくれるか」を話し合った。また、音当てクイズでは「どのように提示するか」についてとても悩んでいた。手作り楽器の容器等は他のもので代用するようにすすめたが、子どもは同じものを欲しがるからと集めるのに苦労していた。

この様に見通しを立てて進めていかなければならない活動は、自分たちに任される部分が多く、自主的に取り組めるようになる。人間関係も密になり、様々な発想が湧いてくる。これはこの活動のもっとも良い効果である。

今回は、日頃体験することが少ないものをプログラムに入れようと考え、「おねえさん、おにいさんのうたをきこう」を企画し、童謡の合唱を聴いてもらった。真近に響く声に子ども達や保護者の方も聞き入ってくれた。このような機会に本物を聞かせるチャンスを作ることはとても大切なことだと改めて実感した。

いつもながら、学生は「子どもと楽しみたい。このあそびの森に招待した子どもたちを楽しませたい。」との思いで当日を迎える。この意欲の高まりを大切に、あそびの森活動を学生の保育職への期待と取組意欲の高まりに繋げたいと願っている。

プログラムNo.②

活動名 「ダンボールのパズル絵」

実施日 平成22年6月27日(土)
10:00~12:00 13:30~15:15

ねらい

- ・連想遊びをしてイメージを広げ、柔軟性と想像力を培う。
- ・ダンボールが造形表現の素材になることを体験し、身近な廃材に対する感受性を高める。

参加人数 145名 参加家族49組
(子ども51名/保護者30名)

担当者 若杉雅夫

参加スタッフ 教員:4名
学生34名(短大24名、四大10名)



ダンボールの宝探し

内容

このプログラムは、平成18年に実施しており、前回は、親子ともどもダンボールのパズル絵あそびを十分に楽しみ、活動の「ねらい」を達成することができたと考えている。

今回も内容は前回と同様、使用済みの段ボール箱を切り、丸や四角・波形・穴の開いた形・細長い形など大小様々なダンボール片をたくさん用意した(形がワンパターンにならないように注意し、学生一人につき50片ほど作り、約千片用意)。

当日は、「あそびの森」の中央にダンボール片の大きな山を二つ作り、その山から参加者は、宝探しのように色々な形のダンボール片をたくさん集めた。次に、画用紙の上で構成遊びし、十分に自由な組み合わせを楽しんだ後に、コレダッ!という形を糊で止め、その上に色紙を貼ったりクレパスで描き加えたりして、ダン

ボール片のパズル絵を楽しく飾った。

色紙やクレパスでお化粧された子どもの作品は、驚くほどに豊かで自由な表現になっており、学生はもちろんのこと、お父さんやお母さんも、その生き生きとした作品に、心が惹きつけられ感嘆するばかりであった。保護者のこの「気づき」がこのプログラムの一番の狙いといってよい。

完成後、パズル絵を全員披露した。一人ひとりの子どものイメージの豊かさに参加者全員が拍手喝采し、発表した子どももみんなに注目され、照れながらも心がいっぱい満たされたようであった。

早くできた子どもは、あらかじめ用意した丸型の段ボールを使って顔のメダルを作った。顔メダルを子ども全員が首にかけて、意気揚々と解散した。

総括・反省および考察

ダンボールのパズル絵を、プログラムとして最初に実施した前回は、子どもの年齢(2~6歳)を想定すると、やや難しいのではないかと考えていたが、実際は、こちらが考える以上に子どもたちは、豊かな発想力と表現力を発揮した。今回も前回同様、子どもの活動は自由闊達に展開した。さらに、保護者も学生も子どもの表現の豊かさを目の当たりにし、この遊びを通して、子どもへの理解がさらに深まったのではないかと考える。

学生の支援に関しては、構成遊びの段階での言葉がけや、子ども達の作品発表での紹介の仕方ならびに誉め言葉などが、考えていた以上に子ども一人一人の意欲や心を豊かに広げるような内容になっており、学習の成果がよく表れていたと考えている。



素敵なパズル絵の出来上がり

プログラムNo特**活動名** 「ネイチャーあそびの森」**実施日・会場** 東海第一幼稚園

6月27日(土)

午前AM9:00~PM12:00

ねらい

- ・天候にも左右され、自然環境もこちらの思うようにはならないなかで、自然に親しみ、植物や小動物に慣れ親しむ。
- ・植物を植えることは、その後の世話など、育てるために継続した世話が必要なことを学ぶ。
- ・6月という季節にはどのような生き物がいるのか、戸外の雑草地で学ぶ。

担当者 長谷部 和子**参加人数** 27名 参加家族11組
(子ども16名/保護者11名)**参加スタッフ**

学生・22名(長谷部ゼミ14名、4大8名)

内容

4、活動内容

- ① はじめのあいさつ
- ② スケジュールの説明
- ③ パッションフルーツ(フルーツ時計草)のお話
- ④ みんなでフルーツ時計草の苗を植える
- ⑤ 水やり、ツルの巻き付け
- ⑥ お兄さんやお姉さんたちとの雑草での遊び(子どもさん1人に学生が約2人つく)
- ⑦ ハンドベルによる「キセキ」(by Green)の演奏(学生)
- ⑧ おわりのあいさつ

活動の様子

短大以外の場所で、しかも戸外で行う活動は初めてなので、制限のない一般募集は第1回目ということで避けた。そのため、朝からの雨にも関わらず、参加者がちょうど良い数にまとまった。保護者側には珍しい植物ということもあって、当日の飛び入り参加もあった。

保護者、子ども、学生ともども、畑を耕すなどの活動は全く経験がない人がほとんどで、事前に練習した男子学生の姿に感心する保護者がいた。子どもたちは土に触れることに抵抗な

く学生とともに臨み、その姿を保護者が見ているというパターンが多かったが、保護者・学生、子らと一緒にいき、時に交代して行く姿も見られた。

水やりを使用した入れ物は、学生たちが「ペットボトル」を利用して、装飾を凝らし作成したものである。その水やりは、使用した後、その横の芝の中で「バツタ取り」としても使用できた。この時期のバツタは、まだ小さいので、「キャッチ アンド リリース」精神で最後には芝生に離した。

学生の様子

「ネイチャーあそびの森」を実施する前に、2回ほど現地で現状視察と植える場所を耕し、整地を行った。学生には鍬・備中・スコップなどの名称と用途の説明から始まり、実際に使用する機会を設けたりした。持ち方・姿勢や場所などを考えないと危険であることを教えていたが、植物を植えることに強い関心を示したことに教員側が驚いた。やはり、最近の自然に親しみ、野菜作りなどが行える場所や機会があることに価値を見出していたのには興味深い。

まとめ

多くの学生たちが自然に恵まれた環境に居住しているのにも関わらず、自然を利用した「あそび」にはあまり関わらないで過ごしてきた。しかし、短大の学生たちがこの環境を利用しないのはあまりにももったいなく、自然の中で子どもたちを育む中でリーダー的存在に育てほしいと強く願う。学生たちも蛇やカエルの説明もうまくこなし、耕すことにも興味を示しているので、今後もっと進んだ「ネイチャーあそびの森」に進めていきたい。



パッションフルーツを子らと植える

プログラムNo.③

活動名「スライム等で感触遊びを楽しもう」

実施日 H 22年7月31日(土)

10:00～11:45, 13:30～15:15

ねらい

- ・スライムや小麦粉粘土のさらさら、べとべと、すべすべ、等の感触を身体で感じて楽しむ。
- ・伸ばしたり、ちぎったり、丸めたりながら好きな物を作ったり壊したりして楽しむ。

担当者 三羽佐和子

参加人数 136名 参加家族45組
(子ども85名/保護者51名)

参加スタッフ 教員:6名 学生22名

内容

- ・スライム・小麦粉遊びをした。学生達は前年度の大学祭で子ども達相手にスライム遊びを行ったので遊び方やポイントも掴んでいた。それで説明はうまくできたし、子どもたちも遊びの事をよく理解をし、すぐに取り組んだ。
- ・小麦粉粘土も子ども達は学生の説明をよく聞き、喜んで取り組んだ。
- ・スライムを作る時、ヌルツとした感じから、ゲル状に大きく変化するところで、子どもたちは歓声をあげ、学生も一緒に興奮をしていた。



ほーら、こんなに伸びるよー

- ・小麦粉のさらさらの感覚は家庭ではもったいないということで、できない経験なので、子ども達は喜んで感触を楽しんでいた。
- ・小麦粉に水を入れ粘土状になったり、かき混ぜる段階で食紅の色が表れ、色つき粘土になったりしたのを、魔法みたいと感激する子どもたちの姿が見られた。

- ・小麦粉粘土の水の分量が難しく、べとべとになったりしたが、小麦粉をたして切り抜けていた。失敗は学生にとり良い経験だと思う。
- ・出来上がった粘土、スライムを使って、棒にしたり、丸めたり、平らにしたりといろいろな物を作っては壊し、作っては壊しを楽しんでいた。学生も一緒に楽しんでた。
- ・ポンポン体操は、簡単で年齢の低い子でもすぐにできるので、喜んでやっていた。
- ・手遊び、絵本読みは、リハーサルで練習した以上に子ども達の反応があることから、学生は自信をもって取り組んでいた。

総括反省および考察

- ・最初子ども達は母親と離れたくなく、母親と遊ぶ姿が多かったが、少しずつ学生が話しかけたり、ボールを投げたり、ブロックを組み立てて見せたりすることで、だんだん学生と遊ぶようになった。学生が、無理に自分の方に引っ張って遊ばせるのではなく、子どもの思いを受け入れて遊ぼうとする姿をみて、3週間の幼稚園実習で成長したなと感じた。
- ・スライム作りや小麦粉粘土の遊びは、比較的スムーズに流れた。何度も学生と打ち合わせやリハーサルを行ったり、前日までの準備をしっかりしたりした結果と思う。リハーサルの時間を十分とったことで余裕ができ、それが自信につながったようだ。
- ・以下は学生の反省である。このような気づきが出てきたことに成長を感じる

体操をするときには大きな振り付けに心がけたので、わかりやすかったようだ。また、肩、背中をポンポンする前に「次肩だよ！次背中！」などと声かけたこともよかったようだ。

スライムは靴下を脱がせて汚れないようにしたこと、ブルーシート内で遊ぶよう声かけをしたことで、子ども達がそんなにあちこち汚すことなく遊べた。細かい指示の必要性を感じた。

バケツの水で遊ぶとは思ってなかったが、遊んでしまった。早めに伝えるとよかった。バケツも手洗い用、足洗用に分けておけばよかった。

プログラムNo.④

活動名 親子で遊ぼう 「できるかな？」

実施日 H22年8月21日(土)

10:00～11:45 13:30～15:15

ねらい

・発育・発達の著しいこの時期に、動作が上達する巧みな動きや協応能力を身につける。

・家庭で楽しめる手遊び、親子体操、手作り遊具のけん玉で楽しみながら巧みな動作を身につける。

担当者 伊藤 功子

参加人数 126名 参加家族 47組
(子ども77名/保護者49名)

参加スタッフ 学生22名, 教員6名

内容

1. 手あそび
2. どうぶつ体操
3. 親子で体操
4. けん玉づくり
5. できるかなあ
 - ①カラーラダー
 - ②マスジャン
 - ③丸太わり
 - ④マット
6. 絵本の読み聞かせ



動物体操の様子

総括・反省および考察

今回の「できるかなあ」は、けん玉を作って手・物が一緒になった時一つの行動ができるかという協応能力を身につけるねらいがあったので、どの家庭にもある卵パックと割り箸を利用した。保護者たちは、糸の長さや割り箸の位置はどこが良いか工夫して、子どもがうまく卵のパックにボールを入れられるか真剣そのものだった。また、トイレットペーパーの芯とペットボトル、トイレットペーパーの芯ととうふ

の空き箱でもできることを紹介できた。できあがったけん玉を親子で楽しむ姿は微笑ましかつた。また今日できたお友達と仲良くできたことはよかった。さらに、今まで行ってきた跳ぶ能力を身につけてきているので、自由に体験できるようにカラーラダー、マスジャン、丸太わりマットなども設定した。子ども達は運動が大好き。休むことなくすべてに挑戦していた。始めと終わりでは、動きがスムーズになり頼もしく見えたような気がした。



親子体操の様子

運動は繰り返し行うことによって身につけていくものである。体育遊びの大切さやこの時期は最高に運動神経が発達するチャンスであることを毎回訴えてきている。保護者の目や行動に確実に変化がおきている。最初は座って子どもの動く姿を見守っていたが最近では一緒に遊びに参加してきている。

運動の基本となる動作をたくさん取り入れた遊びを計画しているが、限られた時間で、どんな効果が現れるか目に見えないが、子ども達は活発に活動していたことはたしかである。次回も廃品を利用した体育遊びを家庭でできる遊具として考えていきたい。



けん玉遊び

プログラムNo.⑤

活動名 「紙のおもちゃを作って遊ぼう」

実施日 H22年9月18日（土）

10：00～11：45 13：30～15：15

ねらい

親と子どもが1つの作品を一緒になって作ることで、親と子どものコミュニケーションをはかり、また、できあがった作品でいっしょに遊び楽しむ。

担当者 松尾 良克

参加人数 116名 参加家族 42組
(子ども72名 保護者44名)

参加スタッフ 学生28名, 教員4名

内容

- 1) 学生による手遊び
- 2) ペーパークラフトの作り方の説明
- 3) 色々な紙のおもちゃを作り、その作品を使って遊ぶ
- 4) 大型絵本読み

参加状況

活動開始時に、学生による手遊びで子どもの気持ちを引きつけてから、紙の色々な作品の作り方や出来上がった作品での遊び方などの説明を行い、作品作りに入った。

ペーパークラフト作成では、切る・折る・貼り付けるの作業があり、各参加者は親子共々夢中で作品作りに没頭していた。2人以上の子どもと参加された家族に対しては、学生がそれぞれの子どもの付きそい、子どもと一緒に作品を作り、保護者や子どもとのコミュニケーションを取りながら、楽しんでサポートを行っていた。

今回も昨年と同様な作品があり、過去に参加したことのある子どもは、「これ前に作ったことがある」と言いながら一生懸命製作に取り組んでいた。

参加者の中には初めてペーパークラフトを作る方もいて、子どもたちよりも夢中となって作品作りに取り組んでおられる保護者の姿も見受けられた。子どもも自分で切ったり、貼ったりして色々な作品が出来上がることに喜びを感じていたようだった。

作品には、紙グライダー・紙（竹）とんぼ・指人形・吹きごま等があり、作成後親子でロフトから飛ばしたり、回したりして楽しんでいた。

総括・反省および考察

小さな子どもにとって、はさみを使い「線にそって切る」という作業は至難の業であるだろう。上手に切れた時など、親に自慢げに見せていた子どももいた。また、乳幼児にとっては「切る」という行為が楽しく、作品には関係なくいろいろな切り刻んでいる子もいた。

ペーパークラフト作成はマニアックなところもあり、普段の生活では目にすることも作ったりすることも少ない。今回も参加された保護者の方から、「初めて作るのだからとても楽しい。他にも色々あれば教えてほしい。」との声が聞かれた。

また、家庭でははさみを使う機会も少なく、我が子が上手にはさみを使う様子を目の前にして関心されている保護者の方もおられた。

今回も作成する作品を選ぶに当たり、インターネット上では数々の作品が紹介されているが、「子どもが作る」ことを基本に、簡単に出来るもの、作った後で楽しめるものを考慮しながら探したが、適当な素材を見つけるのに難しさがあった。

また、参加者の中には、就園前の子どもも多く、今以上に簡単に作れ、楽しめる作品を探す必要性を感じた。



2) 後期プログラム

プログラムNo.⑥

活動名「皆で楽しく踊ったり、ゲームをした
りしよう」

実施日 H22年10月16日(土)

10:00～11:45 13:30～15:15

ねらい

- ・リズムに合わせて歌ったり踊ったり、体を動かしたりして、親や友達と一緒に楽しく遊ぶ。
- ・わらべうたの歌詞・リズムなどに親しみを持つ。

担当 三羽 佐和子

参加人数 134名 参加家族49組
(子ども78名/保護者56名)

参加スタッフ 教員 6名 学生 38名

内容

1. はじめの会・挨拶
手遊び(AMディズニー, PMピカチュウ)
歌(どんぐり, まつぼっくり)
体操(AMディズニー体操・PMポンポン体操)
2. リズム遊び(狼さん今何時, ジャンケン列車, ロンドン橋落ちた)
3. 終わりの会・挨拶
絵本の読み聞かせ
AMたまごにいちゃん・PMへんしんトンネル
手遊び(やきいもグーチーパー)

遊びの様子

午前中は年齢の低い子が多く、1年生の中にはどう接して良いかわからず、遠巻きに2年生が接する姿を見ている姿があった。

「狼さん今何時」ではせっかく狼のお面を用意したのに、狼のお面が怖くて母親にしがみついていた子もいた。

親が狼役になり自分の子どもを追いかけた。離れられない親子は学生が捕まえる役を引き受け、親子で一緒に逃げるようにした。中にはなかなか捕まらない子もいて、学生も加わり追いかけて楽しく遊んだ。

「ジャンケン列車」は最後に残った子が前に出て「高い、高い」をしてもらってみんなに拍手され、う



れしそうであった。

「ロンドン橋落ちた」では学生たちが橋の役になり、親子でくぐっていき、捕まるとくすぐられることを楽しんでた。

総括・反省および考察

リハーサルを念入りに行ったこともあって、戸惑うこともなく進んだ。また、午前が終わったとき、全体の反省会をした。その反省点を生かして学生が行動したことで、午後はスムーズにいったし、学生も子どもも楽しめたようだ。

打合せ等でそれぞれの役割分担が明確であったことと、グループでの話し合いが2年生を中心になされていたので、目的意識を持って仕事を行っていたように思う。

学生の反省文に「じゃんけん列車を1年生とゲーム説明を行ったが、事前に細かい打合せをしていなかったのも、殆ど自分が勝手に進めてしまった。1年生の成長の場でもあり、事前の打ち合わせをきちんとし、2人で進行をする必要があった。」とあった。2年生の意識の成長にうれしく感じ、今後の活動に生かせると思う。

2年生は3回目であり、実習を経験したこともあって、落ち着いて役割を行っていたし、子どもたちへ積極的に働きかけていた。その姿を1年生が感心して見ていた。1年生の反省文「先輩がどのように計画を立てているのかじっくり見ることができました。さすが何回も実習に行っている先輩は違うなと感じることができました。先輩のように自分も来年引っ張っていけるようになりたいです。」を読み、1年生の学びは大きかったのだろうと感じた。

「狼さん今何時」は保育実習室では狭いかと思ったが、親が自分の子どもを追いかけるという方法をとったことと、一度捕まえると掛け合いがあって次が始まるという、わらべうた遊びの楽しさがあり、混乱もなく楽しめたようだ。子どもは親に捕まえられることに喜びを感じていたようだ。このような機会が少ないので、親も子どもと遊ぶ楽しさを感じたと思う。

「ロンドン橋」は橋を増やすことをせず、学生だけで行った。少し、不安感を持っていた子どもも親が一緒なので安心して参加できたし、捕まらないようにスリル感を楽しんだようだ。

プログラムNo.⑦

活動名 「身近なもので作って遊ぼう」

実施日 H 22年 11月 27日 (土)

10:00～11:45 13:30～15:15

ねらい

・身近にあるものを使って、遊べるものを作
て遊ぼう。

・絵本・歌・体操などを通して、親子と学生が
触れ合い、共に楽しい時間を過ごす。

担当者 田中ヒロ江

参加人数 135名 参加家族47組
(子ども82名/保護者53名)

参加スタッフ 教員 4名

学生 28名

(田中ゼミ10名, 他18名)

内 容

- 1) うた「さんぽ」
- 2) 体操「エビカニクス」
- 3) 作って遊ぼう
- 4) 手遊び「やさきもグーチーパー」
- 5) 大型絵本「ねずみのいもほり」

今回の企画は、遊びの森の見学もしていない
学生がいたり、人数も少なかったりして、なか
なか準備が大変だった。

しかし、3年生だったため、実習の経験もあ
り、計画が決まると子どもを視野に入れた方法
や言葉の掛け方なども自分たちで考え、どん
どん進めていくことができた。また、子ども
の前に立って実際に行くことについても安心
して見ていることができた。

では、一つ一つについて振り返ってみたい。

まず、うた「さんぽ」では、子どもも、保
護者も知らないのか、歌詞を文字で示して、
大勢の学生が前に立って楽しそうに歌った
が、それほど楽しめた感じはなかった。

「エビカニクス」は、学生が楽しそうに
踊ったためか、子どもも大人も一緒に踊る
ことができ、楽しく盛り上がった。母親の中
には、他の子育て支援の場で踊りたいと言
っていた。

「身近なもので作って遊ぼう」家の中にあ
る廃材(牛乳パック、ビニール袋、トイレ
トペーパーの芯、広告紙 など)を捨ててし
まうのではなく、「ちょっとしたヒントで、遊
び道具が

できるよ」と言うことを伝えたくてこの活
動を行った。学生は、作ることも考えたが、
安全な遊ばせ方についても随分検討した。親
さんには、子どもが楽しく遊ぶ姿を見たり、
お土産に持ち帰った作品を見たりして、家
でも作って遊んで欲しいと思う。

「手遊び」「絵本の読み聞かせ」は、学
生もやりやすいし、子どももすぐ馴染んで
くれるため、やっぱりしてよかった。本を
選ぶ時も季節や全体の流れとの関連性も
考えて選ぶなど、心配した学生も実習と
言う経験があったため、本番はそつなく
行うことができた。

反省および考察

今回は、身近なものということで、何を
選ぶかいろいろ作ってみたい試してみたり
した。そこでどこの家にもある牛乳パッ
クと包装紙(雑紙)を使うことにしたが、
家に帰って遊んだのだろうか。飛ばす的
を作るにも、攻撃というイメージは持た
せたくないということで、飛行機に乗っ
てお花畑に行こうと言う発想にしたのだ
が、子どもにはそのことが伝わったろう
か。子どもとの遊びでは、そのように遊
びそのものだけではなく、そこに向けて
の考え方(意識)が、言葉や行動に表れ、
子どもに伝わることを学んで欲しいと思
った。

そして、ロケットは、ビニール袋と筒
を使ったものだったが、簡単に作れること
から小さい子どもで親が作る人にはよか
ったと思う。しかし、膨らませることは、
筒が太いこと、結構空気が多く入ること
で、子どもだけではできなかった。親子
遊びということだったのでこれも良かった
かなと思う。



学生も、この活動を通して一緒に考え、
一緒に準備をすることで、知恵を出し合
い、協力することの大切さなど、多くの
ことを学んだのではないと思う。

プログラムNo.⑧**活動名** 「クリスマス会」**実施日** 平成22年12月18日(土)

10:00～11:45 13:30～15:15

ねらい

- ・クリスマスのイメージを広げ、目に見えない世界へのファンタジーをふくらませ、楽しみへの期待感を持つ。
- ・クリスマスツリーに飾る製作を楽しむ。
- ・歌にあわせて踊る表現を通して親子がスキンシップを楽しみ、気持ちを開放する
- ・クリスマスの歌を聴き、きれいな歌声を聴く体験をする

参加人数 122名 参加家族42組
(子ども 76名 保護者46名)

担当者 篠田ゼミ・高島ゼミ・居崎ゼミ

参加スタッフ 教員4名 学生41名
懇話会ファシリテーター4名

内容

この会では、子育て懇話会を同時に開催した。プログラムの途中から約50分間は親子が離れ離れになり、保護者は臨床心理士や、元園長のファシリテーターと5～8人のグループを作り日頃の育児についてワイワイ語り合う時間を設定した。一方、子どもは学生とほぼマンツーマンのペアを作り、クリスマスの飾りを作り、場内のツリーに飾る作業をするという内容である。はじめと最後は親子一緒に楽しむ時間としている。当日のプログラムは以下の様である。

プログラム

はじめまして

1. 手遊び ・こぶたのさんぽ
2. リズム体操 ・ぐるぐるとカーン
3. パネルシアター ・クリスマスのおくりもの
4. 歌いましょう ・あわてんぼうのサンタ
5. 聞きましょう ・静かなクリスマス
6. (子ども) クリスマスツリーの飾りを作りましょう飾りましょう
(大人) 子育て懇話会 ・内容と考察別記
7. 絵本 ・ふゆのよるのおくりもの
8. おわりのかい ・たのしかったね
さようなら



クリスマスツリー

総括・考察

この活動は、子どもと音楽について学んだ2年生が中心となってプログラムを企画構成し、当日の進行を担当した。手遊びやリズム体操では、子どもの身体表現を中心に考えた。特に、幼児と保護者とのスキンシップを図るねらいを達成できるよう、歌の振り付けを考えた。抱っこされたり、抱きついたり日は頃の中の生活の中でもよく見られる動作だが、歌の中に取り入れられることによって家族のだけれども照れなくスキンシップが図れる利点がある。また、「聞きましょう・歌いましょう」では、静かに聞き入ることができるクリスマスの歌と楽しく楽器を鳴らしながら歌うことが出来る歌を準備した。親子でうたったり、聞いたりという共有できる時間を持つのがねらいである。また、クリスマスの時期でもあるので簡単に作れるクリスマスの飾りを準備した。これらの遊びの提供は帰宅後、家庭の中でも大いに楽しみが継続できるという利点がある。この意図を考慮し、学生の発案でプログラム企画をし、当日も進行することは、しっかりとした責任感と見通しを持った綿密な計画が必要となる。2年生は1年生とのコミュニケーションを図りつつ、自分達の役割を認識し、楽しみながら責任を持ってこなしていく。そんな先輩の姿を真近にした1年生は、今、自分が出れることを能動的に関わっていく。この体験は、保育者に必要な責任感を育てる教材となる。また、活動の中でみられる様々な親子の関わりを体験するチャンスもあり、これからの保育者に求められる子育て支援について、課題を発見できるチャンスでもある。そして、なにより、1、2年生のコミュニケーションが広がる場でもある。この意味でもこの学習は、学生の育ちに繋がる貴重な機会となっているといえよう。

プログラムNo.⑨

活動名 ぐりとぐらになろう

実施日

平成 23 年 1 月 15 日 (土) 保育実習室
午前 10:00 ~ 11:45 午後 13:30 ~ 15:15

ねらい

- ・ぐりとぐらになりきって絵本の世界を楽しむ。
- ・ぐりとぐらシリーズの本を知る。

参加人数 116 名 参加家族 41 組
(保護者 46 名 / 子ども 70 名)

担当者 本間恵美・杉山喜美恵

参加スタッフ 教員名 学生名

内容

- 1 大型絵本読み聞かせ『ぐりとぐら』
- 2 ぐりとぐらになろう! (帽子・しっぽの製作)
- 3 いろいろな「ぐりとぐら」にてあおう
- 4 みんなで食べよう! (蒸しパンを食べる)
- 5 ぐりとぐらの歌をうたおう!

総括および考察

昨年度に引き続き、『ぐりとぐら』を題材にしたあそびを実施した。内容をよりよいものにするためには、1 回限りではなく継続して行くことも必要だと考えたからである。

昨年度、反省としてあがった点は改善し、よい点は残して今年度の内容を考えた。

まず、製作に関してだが、ベスト、しっぽ、帽子の 3 点は多すぎて時間がかかりすぎた。そこで、今年度はしっぽと帽子のみとした。帽子はよりぐりとぐらの帽子に似せるため、折り方を変更した。

また、ぐりとぐらシリーズの絵本は『ぐりとぐら』以外にも数多く出版されており、この機会にそれらの絵本にも親んでももらいたいと考え、絵本を読む時間を設けた。

蒸しパンは昨年度好評であったのでそのまま継続した。

昨年度は実施日が 12 月初旬のため、『ぐりとぐらのおきゃくさま』を読んだが、今年は 1 月なので、まとめとしてぐりとぐらの歌を歌うことにした。昨年度は歌があまり定着していないようだった。歌はぐりとぐらのイメージを高めるのに大切なアイテムであるため、今年度は繰り返し歌うことなど少し時間をかけた。

2 年生の学生が昨年度ほぼ同じプログラムを経験しているため、進行等については比較的にスムーズであったと思われる。やはり、経験があるのとないのとは学生の動きも違うと感じた。

絵本の時間については、多くの参加者に絵本を読んでもらうためにはかなりの冊数が必要となる。それについては、岐阜県図書館の協力を得ることができ、それぞれのタイトルについて複数冊準備することができた。製作が終わった参加者から思い思いに絵本を手により、学生と一緒に絵本を楽しんでいた。このように内容充実のためには、他機関との連携も重要である。



ぐりとぐらシリーズの絵本を楽しむ

昨年度、手洗いに時間がかかったので、今年度は除菌効果のあるシートを準備し、食べる前に一人一人に配った。

終了後、保護者にアンケートをお願いした。その結果から、改善点としては帽子が小さかったという意見をいただいた。内容については絵本の世界を一緒に楽しむことができ、よかったとの意見を多くいただいた。



製作の様子

プログラムNo.⑩**活動名** クッキーの粘土あそび**実施日**平成23年2月5日(土) 集団給食室
午前:10:00～11:45 午後:13:30～15:15**ねらい**

- 親子でおやつ作りを楽しむ。
- 子どもや親の想像力を高める。
- 食べ物を大切にす気持ちと、食に対する意識を高める。

参加人数 132名 参加家族47組
(保護者52名/子ども80名)**担当者** 若杉雅夫**参加スタッフ** 教員7名 学生74名**内容**

「クッキーの粘土あそび」は本年度で6回目の実施となる。「あそびの森」恒例の人気プログラムとなっており、今回も四大食健康学科の協力を得、集団給食室を活動の場として実施した。

活動の支援に関しては、毎年変わりなく一テーブルに一～二組の家族がつき、各テーブルに学生2名が支援に当たり、クッキーの生地作り(白・茶・緑の三色)から始め、形作り、焼き上がり、試食までをフルコースで楽しむ内容になっている。

この活動の特徴は、既製の抜き型を使わずにクッキーの形を創り出すところにある。

抜き型を使わないクッキーの形作りは、時に、常識の枠を超えた想定外のクッキーが出現する。そのクッキーを学生や教員が認め、褒めることで、子どもと親の想像力を刺激し、柔軟性や豊かな想像力・創造性を高めるきっかけになることを「ねらい」としている。

今回も、親子ともども生地を粘土に見立て色々な自分だけのオリジナルクッキーをたくさん作った。小さな子どもは、握ったり潰したり、押ししたり摘んだり、混ぜ合わせたりして、なにやら得体の知れない形だけど妙に魅力のある形を作ったりと、一人一人の子どもが、自分なりに一生懸命無心に形作りに取り組んでいた。その姿に刺激されたのか、お母さんやお父さんも、子どもに負けない集中力で形づくりに没頭していた。

形成後は、食健康学科の教員(2名)が焼き上

げを担当した。焼き上がるまでの間参加者は、学生や同じテーブルで知り合った家族と楽しく話しをしたり、子ども同士や学生と鬼ごっこをしたりし、和気藹々と時間を過ごした。

クッキーが焼き上がりテーブルの上に並ぶと、親子で達成感を感じつつ、それぞれの作った形について、学生も仲間になり話を弾ませた。最後は、クッキーの味見をし、残りを大切に包み、参加者全員笑顔で解散した。

総括・反省および考察

6回目の活動になるが、食品を扱うため、材料用具の準備、学生の支援のあり方、クッキー作りの方法など、毎回綿密に計画し実行している。特に今回は、練習時に(集団給食室で学生がクッキー作りを行う)毎回好みの差が出る砂糖の分量について、3パターン(甘さ控えめ、普通の甘さ、甘め)に分けてクッキーを作った。甘味に関しては、毎回頭を悩ませている。しかし、食健康学科も加わった子育て支援活動におけるクッキー作りのプログラムなので、子どもの味覚を育てる観点も大切にしなければならない。つまり甘ければよいというものではない。そのことから、今回それぞれの甘味料を学生同士で試食し、平均値を作った。結果として、普通の甘さを基準として参加した家族の好みに合わせプラスマイナス30グラムとした。クッキーの甘味に関する評価はおおむね良好であった。

また、形作りや味見での学生の言葉がけや誉め言葉は、子ども一人一人の意欲を引き出し、心を豊かに耕すことが出来ていたと考えている。



オリジナルクッキーの出来上がり

プログラムNo.⑪

活動名 「体を動かして遊ぼう」

実施日 H23年2月12日(土)

10:00～11:45 13:30～15:15

ねらい

冬季は外出を控えがちになり、家庭で過ごす幼児はもちろんの、保育園・幼稚園に通う幼児にとっても、他の季節よりは運動量が少なくなる傾向がある。そのようなことを想定して、春への季節感とともに、「体を動かす」楽しさを味わう。

担当者 居崎時江・大西信行・田中ヒロ江

参加人数 100名 参加家族 38組

(子ども60名/保護者40名)

参加スタッフ

教員 6名 学生 38名



「大型バスに乗ってます」の一場面

準備のプロセス

以上のようなテーマとねらいは、教員が用意したが、プログラムとその活動に関する内容については、参加する学生の意志を尊重する方針を採った。参加学生は1年生で、実施に向けてそれぞれの学生が持ち分を發揮できるように仕立てていくことが教員サイドの課題となった。

まず前期に開催される「あそびの森」に毎回6～7名ずつ参加させて記録を取らせることにした。これまでの学生同様、短期大学部の2年生が企画した活動に親子が興ずる様子を、多くの1年生は新鮮な印象を受け、それを詳細に記載していた。

後期当初にこの2月の企画と運営を1年生のクラスが受け持つことを伝え、参観もそのことを意識させて、親子と関わることを含めて参加

するように促した。このような目標を持たせて、午前の部と午後の部でグループ分けをし、各グループでプログラム内容を出し合い、前記3名の担当者が意見や助言をしながらテーマとねらいに沿っているか、意識づけを図った。グループ内ではプログラム内容毎の班編成を作り、準備作業は進捗状況に応じて相互に助け合うよう、各教員は、いずれも助言と後方支援に徹した。

プログラムの内容

午前の部

- ①かえるのロボット ②大型バスに乗ってます
- ③鬼退治ボーリング ④鬼退治玉入れ ⑤折紙
- ⑥読み聞かせ「そらまめくんのベッド」

午後のプログラム

- ①春ですよ春ですよ ②アイアイ(手あそび)
- ③なりきりサイコロ ④おひなさまとおだいら
- さまづくり ⑤ペープサート「ひなまつり会」
- ⑥ひげじいさん(手あそび)

総括

集合した時点では緊張した面持ちだった学生も、来場者への対応とともに動きが始め、午後も午後もその勢いで最初のプログラムに入った。いくつかの班では展開が早すぎることもあったが、その分親子での作業する場面で調整して、予定していた時間に終了した。

会場全体の動きを見ながら行動する学生は少なかったが、それぞれの班では、各自が受け持ったパートに懸命に取り組み、一応無難にこなしているように見受けられた。



折り紙でひな人形を作っている様子

3) その他のプログラム

その他のプログラムNo.①

活動名 「ブラジル人親子支援」

実施日

第1回 平成22年10月24日

第2回 11月21日

第3回 12月19日

第4回 平成23年1月23日
スピーチコンテスト

担当者 長谷部和子・杉山喜美恵・高山育子

参加人数 のべ164名

	1回	2回	3回	4回	計
参加者	21	14	28	23	86
家族組	5	5	10	11	31
大人	5	6	12	12	35
子ども	16	8	16	11	51
学生	1	4	22	18	45
教員	4	5	6	5	20
通訳	2	2	1	1	6
その他	0	1	2	4	7
合計	28	26	59	51	164

(3) スケジュールと参加者の動き

	保護者	子ども	学生
14:00	挨拶【保育実習室】		
14:10 15:30	日本語講座 【751教室】	自由あそび 【保育実習室】	
15:30 16:00	支援物資選び 【学生ホール】	おやつ 【学生ホール】	
16:00	おわかれの挨拶【学生ホール】		

【 】内は会場名

(4) 内容

2010年度は10月から1月までの毎月1回、計4回プログラムを開催した。開催日はすべて日曜日であり、14時から16時までの2時間、子どもと保護者の活動を分けて行った。子ども対象の活動では、全体で行なうあそび（パネルシアターや手あそび、読み聞かせなど）の時間も設けたが、各回とも開催時間のほとんどが自

由あそびであり、会場である本学保育実習室に設置されている木製大型遊具やキーボードのほか、かるたや折り紙、ボール、紙、マジックなどを使って遊んだ後、学生と子どもは一緒におやつを食べた。

保護者対象の活動では、第1回から第3回まで日本語講座を行ない、第4回は日本語スピーチコンテストを開催した。日本語講座・スピーチコンテストの終了後、保護者は子どもたちがおやつを食べている部屋に移動し、本学が用意した生活支援物資を選んだ。第1～3回まで保護者の日本語講座を見る学生はいなかった。しかし、第4回のスピーチコンテストでは、子どもの人数が少なかったこともあり、保護者のスピーチを聞くよう促し、何人かの学生は最初から最後までスピーチを聞いていた。

(5) 反省

プログラムに参加した学生はブラジル人の子どもたちと遊ぶことに興味を示した。また、語学は通じなくても子どもは同じという意識を持ったことに成果を感じるが、その子供たちの抱えている問題点について積極的に「知ろう」とする学生はほとんどいなかった。卒業後、現場で子どもたちに接した時にきちんと対応できるよう、学生生活のいかに意識を持たせるかが今後の課題となる。



その他のプログラムNo②

活動名 「ペープサート劇を観る会」

出張「あそびの森」活動として設けている「ペープサート劇を観る会」は、短期大学の保育内容研究の受講生と東海学院大学田中ゼミ生といっしょに近隣の依頼を受けた幼稚園や保育所等に出かけて行ってペープサート劇や手遊び、身体表現遊び、音楽遊びなどを行う活動である。大学内での「あそびの森」では親子での参加であるが、幼稚園や保育所では子どもだけの集団である。おのずとそれぞれの場所、集団の形態によって取り上げる遊びの内容も変えなくてはならない。この体験が学生にとって、大きな学びとなっている。

平成 22 年度出張公演記録

プログラム構成は以下の通りである

- ① あいさつ
- ② 手遊び
- ③ ペープサート劇
- ④ ゲーム
- ⑤ リズム遊び
- ⑥ マリンバ演奏
- ⑦ 絵本
- ⑧ さようなら

- 10月30日「出張あそびの森」は岐阜市女性センター主催の「HAPPYDAY」の一プログラムとして岐阜市のハートフルスクエアGで開催された。この日は他のイベントと重なったが約50名の親子の参加があった。
- 12月4日岐阜市社会福祉協議会主催の「オンリーワン私たちの芸術祭」の中の「ちょっと早いクリスマス」プログラムを依頼され、出張公演した。場所は岐阜市のハートフルスクエアGで、前回と同じ場所だったので、会場内での準備や配置を考える事はスムーズに行えた。今回は短期大学部生14名で上演した。参加者は約80名と多く、対象は障がいを持たれた方々であり、夏の施設実習でお世話になった施設の方々も含まれていた。思わぬ再会に学生も心が和んだ。
- 12月10日付属の第一幼稚園児約60名を招いての「やきいも大会」、消防署に届出をした後、落ち葉を集め、前もって収穫したさつ

まいもを落ち葉で焼いた。焼けるまでの間、「たきび」「いもほり」「やきいもグーチーパー」の歌や手遊びで遊んだ。目の前の状況と歌の歌詞が一体となる体験が出来た。その後、テニスコートにシートを敷いて、子ども達とやきいもを食べて遊んだ。

- 1月21日岐阜東幼稚園に出かけた。園児約40名が参加してくれた。ペープサート劇2本とリズム遊びやゲームなどと盛りだくさんであったが飽きることなく楽しんでくれた。

この活動は東海学院大学と短期大学部が合同で主催している。この事は、大きな特徴であり、学生はお互いに刺激となり相乗効果がある。

今年度は、外部に対して積極的に働きかけなかったことで、依頼園が少なかった。「あそびの森」活動もだんだん軌道に乗り、ゼミ単位での「出張あそびの森」の回数も増えてきた。保育内容研究としての受け入れは金曜日の午前中に限るのでこのあたりも多く受け入れられない原因となっている。来年度は積極的に近隣の園に呼びかけをしていきたいと考える。



その他のプログラムNo③

活動名 長良児童センター関連

実施日

	日にち	活動内容	学生
前期	5/12	補助	4
	5/19	補助	4
	6/23	補助	4
	6/30	補助	2
	7/7	学生企画	5
	7/14	学生企画	6
	9/8	ボディペインティング (手伝い)	14
	9/15	託児(母親講座)	14
後期	12/15	クリスマス会	14

会場 長良児童センター

長良児童センターで実施されているポロちゃんクラブ(1歳児幼児とその保護者対象)に上表のように参加した。

ポロちゃんクラブには、毎年25組程度の参加登録があり、連続講座のため、各回の参加人数は多少増減するが、当校の学生が参加できるよう水曜日の午前中に設定していただくなど学生の学習のためさまざまな配慮をいただいている。



室内での活動の様子

7/7、14の両日は、学生企画を実施する場としていただけた。7/7はちょうど七夕と重なったため、七夕を題材にしたパネルシアター「きつねくんのおねがいごと」を演じ、工作では七夕飾りを作り、手あそび「あたまかたひざぼ

ん」、ふれあいあそび「あぶくたった」を行った。7/14は、「かくれんぼ」のパネルシアターとペットボトルバスケット作り、手あそびは「あんぱまん」、ふれあいあそびは「らっこ」を行った。各自が必ず一つの役割を持って参加できるように配慮した。

ボディペインティングは、雨天であったため、室内での活動となり、残念であった。

その他のプログラムNo④

活動名 岐阜市青少年育成市民会議関連

実施日

日	名称	学生
10/28	第5ブロック「わんぱく祭り2(ホップ・ステップ・ジャンプ)」	28
11/10	ながら「親子ふれあい教室」	14

会場 10/28 西部コミュニティセンター

11/10 長良公民館

これらの講座は岐阜市青少年育成市民会議が子育て支援を目的として開催している講座であり、小学校校区ごとに行う「親子ふれあい教室」とブロック毎に行う「子育てを考える講座」とがある。第5ブロックは昨年度に続き、依頼していただけた。参加者は未就園児とその親である。内容は、

- ①動物たいそう(全員)
 - ②みんなでゲーム
 - ・おねえさんとコスモス山にゴール
 - ・みんなで玉入れ
 - ③ペープサート(みんながわらった)
 - ④手あそび(くりのきやまのきつね)
 - ⑤紙皿シアター(お月さんにおみみ)
 - ⑥コーナーあそび
 - ダンボールハウス、風船ぼんぼん、マットコーナー、工作(グルグルコプター)、すずらんテーププール、その他でづくりおもちゃ
 - ⑦みんなで踊ろう あんぱまんたいそう
- コーナーあそびでは、それぞれ学生が担当コーナーを決め、子どもたちと自由にあそんだ。すずらんテーププールは子どもたちにとっても人気があった。低年齢の子どもたちであ

るため、細かいちりがでないよう新聞紙ではなく、すずらんテープを使用した。

ながら「親子ふれあい教室」は20組の参加者があった。

ながら「親子ふれあい教室」は小学校校区単位で実施される活動なのでブロック行事の「子育てを考える講座」よりも参加組数が少ない。また、子どもの年齢が1歳以下と低年齢であり、あまりに学生が多いと、子どもたちに恐怖感を与えてしまうので1年生のみの参加とした。

今まで2年生と一緒にあった1年生が初めて自分たちだけで実施するプログラムであり、1年生にとって活動デビューである。また、親子にかかわる、特に親に話しかけることは子どものみの場合より難しく、はじめは緊張ぎみであったが、時間がたつにつれ、笑顔でかかっている姿が見られた。

その他のプログラムNo⑤

活動名 子育てサークル関連

実施日

日にち	内容	学生
5/26	長森子育てサークル	13
8/26	ツインズ夏祭り	14
12/8	長森子育てサークル	14

会場 5/26、12/8 あそびの森

8/26 長森コミュニティセンター

「長森子育てサークル」は、当校の卒業生が実施している子育てサークルである。継続的に行われている活動のうち、前後期1回ずつをあそびの森として実施しており、異年齢で参加者も多いあそびの森プログラムとはまた異なった学びの場となっている。

内容は、学生が子どもと自由にあそぶことを中心とし、母親は集まって子育てに関する悩みなどを話し合うこととしている。前期はまだ母親と離れられない子どもたちもいたが、後期になると離れられる子どもが増え、動きも活発になってきた。前期の参加学生は2年生、後期は

1年生であった。1年生は実習前ということもあって関わり方の点で不安もあったが、子どもたちが成長していることもあってよく遊んでいた。

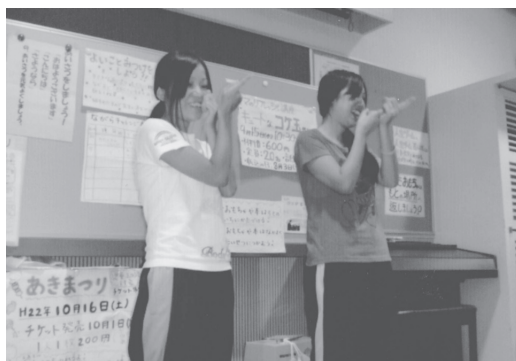
その間、母親は集まって話をしたが、トイレトレーニングや幼稚園のことについての話題がでた。教員もファシリテータとしてかかわった。主催者から「とても楽しい時間だった。ぜひまた機会をもってほしい」という感想が多かったとの報告を受けた。

多胎児サークル「G・ツインズ」のイベント(8/26)は、今年初めての依頼である。夏期休暇中ではあったが、学生たちはまじめに取り組んでいた。参加者はすべて双子たちであり、組数も多く普段とは異なる環境に学生たちもとまどいを感じていた。

双子は常に子どもが二人なので子ども同士で遊ぶことが多く、双子ならではのかわりの難しさを学んだようである。学生にとって非常によい学びの機会となった。



クリスマス会の様子



子育て支援イベントでの様子

その他のプログラムNo⑥

活動名 「ハッピーデイ・あそびの森」

実施日 平成22年10月30日(土)

13:30～15:30

会場 ハートフルスクエア-G ふれあいサロン
ねらい

- ・大学のお兄さんお姉さんたちと一緒に遊びながら、「あそびの森」の時間を楽しく過ごす。
- ・マリimba・合唱演奏を聞いたり、一緒に歌ったりして音楽に親しむ。
- ・スライムや小麦粉粘土のさらさら、べとべと、すべすべ等の感触を身体で感じて楽しむ。

担当 若杉雅夫 篠田美里 三羽佐和子

参加人数 89名 参加家族約35組

参加スタッフ 教員 3名 学生 50名

内容

- ①あいさつ
- ②手遊び
- ③ペープサート上演
- ④マリimba演奏
- ⑤合奏演奏(四大コーラスクラブ)
- ⑥絵本の読み聞かせ
- ⑦みんなで楽しく遊ぼう(スライム 小麦粉粘土)
- ⑧絵本の読み聞かせ
- ⑨さようなら

総括・反省

- ・いつもと違う場所での「あそびの森」で、学生は緊張した面持ちであった。しかし、すぐに馴れたようで、子ども達に積極的に関わり、遊びを教えたり、演奏を一緒に楽しんだりした。
- ・内容が盛りだくさんだったので、学生の数も多かったが、互いに助け合ったり、教えあったりする姿がみられ、よい交流となった。
- ・場所柄「あそびの森」のコーナーへの出入りが自由のため、親子が出たり入ったりして、少しやりにくい面が見られたが、学生達はそんなに戸惑うことなく演奏・上演したり、遊びを説明したりして、プログラムを進めていた。
- ・マリimba演奏は音色が柔らかく、親子とも聞き惚れていた。合唱は知っている曲を多く入れてあったので、一緒に口ずさむ親子が多かった。
- ・ペープサートはストーリーが簡単なのと、絵がはっきりしていたので、喜んで子ども達は見入っていた。
- ・スライム・小麦粉粘土は家庭でなかなかできないものなので、親子で感触を楽しんでいた。

その他のプログラムNo⑦

活動名 「クリスマス会」

実施日 平成22年12月8日(土)

10:00～11:30

会場 長良児童センター
ねらい

- ・大学生のする手遊びや絵本の読み聞かせなどを見て、一緒にし、お兄さんお姉さんに親しむ。
- ・新聞紙を破ったり、かぶったり寝転がったりして体中でその感触を楽しむ。

担当 三羽佐和子

参加人数 約40名 参加家族約20組

参加スタッフ 教員 1名 指導員3名
学生 15名

内容

- ①あいさつ
- ②出席確認
- ③手遊び(糸巻き)
- ④体操
- ⑤手遊び(一本橋こちょこちょ)
- ⑥新聞遊び(遊びの説明、一緒に遊ぶ)
- ⑦手遊び(キラキラ星)
- ⑧絵本の読み聞かせ

「どうぶついろいろかくれんぼ」

⑨さようなら

総括・反省

- ・進行は長良児童センターの指導員が行い、③⑤⑥⑦⑧を学生達が受け持つ形で行った。
- ・始まるまでは、三々五々親子が集まってくるので、下の遊具の部屋でその相手をしていた。学生によって、自分から積極的にアプローチする者と、子どもが近くへ来てくれたら働きかける者とがあり、まだ、実習に行ったことのない1年生ではこれも一つの姿だなと感じた。
- ・新聞プールでは子ども達は投げたり、埋まったりしてとても喜んで遊んでいたのも、学生も満足だったと思う。学生の反省文「プールを準備している間も子どもの熱い視線を感じた。新聞紙を出したとたん、すぐさま数人の子が入った。他の学生が中に入って新聞を上を投げたり、その子が見えなくなるくらい新聞をかけた様子を見て、割とダイナミックにやっても良いと思い、自分も入って積極的に触れ合った」
- ・準備で、様々な物を消毒する姿を見て、年齢の低い子の対応の大変さを学んだようだ。

おわりに

今年度のあそびの森は、「はじめに」でも書かれているように「ネイチャーあそびの森」プログラムが新しく加えられたこと、東海学院大学子ども発達学科（以下四大）が担当したプログラムの数が増えたことが特徴としてあげられる。

今まで「あそびの森」では自然の中で実施されるプログラムはなかった。最近では自然環境の大切さが叫ばれているが、自然にふれる機会が少なくなっているのも事実である。そういった現状を考えるとこのプログラムは参加者にとっても学生にとっても有意義なものであったと思われる。担当者が述べているように今回は初めての試みということで一般募集はされなかったが、継続的に取り組んでいきたいプログラムである。

四大との協働は昨年度より始まり、昨年度は1プログラムを担当したが、今年度は2プログラムに増えた。「あそびの森」に参加することは学生にとってよい学びを得られる重要な機会である。短大、四大という枠をこえ、学生たちが数多く体験できるようにしていきたい。

「あそびの森」は、同じ内容で午前、午後の2回、行われる。これも「あそびの森」の特徴としてあげられる。通常のイベントは1回限りの場合が多いが、同じ内容で2回行うことで午前の反省をふまえて午後の自分の取り組み方を改善することができ、また、午前と午後の参加者の違いなどにも気付くことができる等、振り返りを通して学生の学びを深めることができる。

外部からの依頼も多くなってきた。これもうれしいことである。しかし、保育実習室、それ以外の場所で行われる「あそびの森」に関わらず、行う以上、参加者に満足していただけるような内容でなければならない。それが我々、実施者としての責任である。担当者が述べているように、学生が自信をもって実施できるためには、準備をしっかりすること、特にリハーサルの時間を十分とることが重要である。限られた授業時間の中で準備やリハーサルの時間をどのように確保して質の高い内容を提供していくかが求められている。

今年度の反省をふまえ、「あそびの森」がよ

りよいものになるよう、地域子どもたちや保護者にあそびを提供するという所期の目的を達成するために、常に前進していきたいと考えている。

平成22年度「あそびの森」運営の記録

◇運営

短大部・・若杉 雅夫 三羽佐和子
松尾 良克 伊藤 功子
長谷部和子 篠田 美里
杉山喜美恵

四大・・大西 信行 田中ヒロ江
居崎 時江

◇事務担当

三羽佐和子 川島 大司 富田 理恵

◇全プログラムの親子の名札作成 松尾 良克

◇出席カードの製作及び室内装飾 若杉ゼミ生

<執筆担当>

若杉 雅夫 プログラム②⑩
三羽佐和子 プログラム③⑥
子育て懇話会
その他のプログラム⑥⑦
松尾 良克 プログラム⑤
長谷部和子 はじめに
プログラム特
その他のプログラム①
伊藤 功子 プログラム④
篠田 美里 プログラム①⑧
その他のプログラム②
杉山喜美恵 プログラム⑨
おわりに
その他のプログラム③④⑤
大西 信行 プログラム⑪
田中ヒロ江 プログラム⑦

平成22年度 「あそびの森」プログラム

場所：東海学院大学西キャンパス 7号館5階 「あそびの森」の部屋

<前期プログラム> 時間 AM10時～11時45分 PM1時30分～3時15分

No	開催日	あそび	どんなことをするの？
1	5月22日	おんがくたんけんたい	部屋にある材料で楽器をつくってみましょう。そして、音の探検ごっこ遊びをしましょう。どんな音がでるのかな？
2	6月26日	段ボールのパズル絵を作ろう	身近にある段ボール、遊び方はいろいろありますが、今回はパズル絵に挑戦しよう。どんなパズルができるかな。
3	7月3日	①スライム等で感触遊びを楽しもう ②子育て懇話会	スライムや小麦粉粘土を丸めたり、のぼしたり、ちぎったりなどしながら、ベタベタ、さらさら、つるつる等を感じて遊びましょう。 <u>汚れても良い服装</u> で。タオルも持ってきてね。保護者の方は子育てについて楽しく語り合ひましょう。
4	8月21日	親子で一緒に遊ぼう「できるかな？」	親子で一緒に楽しく遊びましょう。跳んだり、転がったり、忙しく動きまわります。お父さんの出番ですよ。親子とも <u>動きやすい服装</u> で来て下さい。 <u>タオルとお茶</u> があるといいね。
5	9月18日	紙のおもちゃを作って遊ぼう	紙を切ったり組み立てたりして、おもちゃを親子で作ります。作ったものでみんなと遊ぼう。 <u>ハサミ</u> を持ってきてね。
特	6月26日	ネイチャー「あそびの森」	自然の中で雑草を抜いたり、土をいじったりして、親子で学生と一緒に「フルーツ時計草」を植えましょう。成長すると甘酸っぱい実がなり、ジュースにすることができます。大きな絵を大きな板に描いたりもしてみよう。(東海第一幼稚園児のみ)

<後期プログラム> 時間 AM10時～11時45分 PM1時30分～3時15分

6	10月16日	みんなで楽しく踊ったり、ゲームをしたりしよう	わらべうた遊びや簡単なゲーム遊び、人数も場所も自由にできるところがポイントです。みんなで息を合わせることも楽しい。親子で一緒に楽しみましょう。家でもやってみてね。
7	11月27日	身近なものを使って遊具を作ろう	新聞・空き箱・ペットボトルなど、身近なものを使って何ができるでしょうか。頭を使い、手を使い、工夫して作ることで、買ったものとは違った楽しみ方ができるでしょう。
8	12月18日	①クリスマス会 ②子育て懇話会	クリスマスの楽しいお話を聞きましょう。お友だちへのプレゼント作りもします。何ができるかな。保護者の方は子育てについて、楽しく語り合ひましょう。
9	1月15日	「ぐりとぐら」になろう	帽子とパンケーキを作って、みんなの大好きな「ぐりとぐら」になって、お話の世界を楽しみましょう。
10	2月5日	粘土遊びでクッキー作り	小麦粉を粘土に見たてて、色々な形を作って、クッキー作りを楽しみます。おいしいクッキーを作ろう。材料費として1家族200円、エプロン、バンダナ(三角巾)を持ってきてね
11	2月12日	体をほぐして春を迎えよう	冬から春にかけて、地表を這ったり、草花にたかたりする「いろいろな虫」になって、クネクネ、モゾモゾ体を動かしてみよう。
	11～1月 金曜午前	ペープサート劇を観る会	幼稚園、保育所団体別鑑賞会(団体のみ) <u>団体鑑賞については相談に応じます。(出張可)</u>

平成 22 年度 あそびの森参加者数

No	開催日 (プログラム)	参加者数				
		組	子ども	親(母・父・他) 大人	園 施設	合計
【月例プログラム】						
①	5/22 (おんがくたんけんたい)	53	93	64 (53・12)		157
②	6/26 (段ボールのパズル絵を作ろう)	49	86	59 (55・3・1)		145
特	6/26 (ネイチャー「あそびの森」)	11	16	11 (11)		27
③	7/3 (スライム等で感触遊びを楽しもう)	45	85	51 (44・6・1)		136
④	8/21 (親子で一緒に遊ぼう)	38	77	49 (35・14)		126
⑤	9/18 (紙おもちゃを作って遊ぼう)	42	73	44 (35・9)		117
⑥	10/16 (踊ったりゲームをしたりしよう)	49	78	56 (49・6・1)		134
⑦	11/27 (遊具を作ろう)	47	82	53 (44・8・1)		135
⑧	12/18 (クリスマス会)	42	76	46 (40・6)		122
⑨	1/15 (「ぐりとぐら」になろう)	41	70	46 (39・7)		116
⑩	2/5 (クッキー作り)	47	80	52 (47・5)		132
⑪	2/14 (体をほぐして春を迎えよう)	38	60	40 (32・8)		100
	合計	501	876	571 (483・84・4)		1,447
①	10/24 11/21 12/19 1/23 (ブラジル親子)	31	51	35(20・15)	6	92
②	全 回 (ペープサートを観る会)		118	112(36・76)	13	243
③	出張あそびの森	55	64	62(53・5・4)	3	129
④	ポロちゃんクラブ	225	225	225(225)	27	477
	合計	311	458	434 (334・93・4)	49	941
	総合計	812	1,334	1,005 (817・180・8)	49	2,388

平 22 年度「あそびの森」参加者数 子ども 1,334 名／保護者 1,005 名 (812 組) 園・施設 49 名

総合計 2,388 名